

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K21449

研究課題名(和文)「縁」概念に着目した宗教的共同性の研究：チベットのボン教徒を中心に

研究課題名(英文) A Study of Religious Community Focusing on the Concept of "En": A case study of Tibetan Bon religion

研究代表者

小西 賢吾 (Konishi, Kengo)

京都大学・人と社会の未来研究院・特定講師

研究者番号：80725276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グローバルに展開するチベットの宗教文化を主な対象に、宗教を实践する人びとの間に形成される共同性を「縁」概念に着目して解明することを目的とするものである。研究期間全体を通じ、本研究は文献調査と現地調査の両側面から、チベットの伝統宗教ボン教における「縁」概念をめぐる考察を進めた。文献調査では、高僧の伝記をはじめとする現地語文献の分析を行った。また現地調査では、ボン教僧院における大規模な儀礼の参与観察を実施し、そこで出合いやつながりがどのように生じ、また語られるのかについて事例を収集した。以上から縁概念とコミュニティ論と接続する視座を構築する成果を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現代社会が直面する過疎高齢化や伝統的共同体の崩壊といった状況のもとで、どのような共同性が構築されるのかという問題を、宗教の観点から解明する意義を持っている。とくに、アジア仏教圏特有の共同性に関する概念である「縁」について、チベットの事例分析と人類学および関連分野におけるコミュニティ論を接続するという学術的意義を持っている。また、これらの成果は現代社会における新たなコミュニティ作りの実践に接続できる点で大きな社会的意義を有するものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the community formed among people who practice the religion by focusing on the concept of "en", through a case study of Tibetan Bon religion which has been globalized since late 20th century. Throughout the research period, this study has been conducted both literature study and field research to examine the concept of "en" in the Tibetan Bon religion. In the literature study, we mainly analyzed the biographies of monks. In the field survey, we observed a large-scale ritual at monasteries and collected examples of how encounters and connections occur and are discussed there. The results of the above research enabled us to construct a perspective that connects the concept of "en" and community theory.

研究分野：文化人類学

キーワード：宗教 縁 共同性 チベット ボン教 ボン教

## 1. 研究開始当初の背景

前世紀以来、工業化、都市化、グローバル化などに伴う「伝統的」共同体の崩壊や希薄化は、ヒトが現代の政治・社会・経済の文脈の中でいかなる共同性を構築し維持するのかという問題を常に提起してきた。わが国においては、2000年代後半から「無縁社会」ということばが一般的にも注目を集め、社会における共同性の断絶と再構築が、東日本大震災等をへた地域再生の問題とも関連しながら、重要な課題として浮上している。同時に、それは個別の地域を越えた連帯や安全保障、災害対応といったより普遍的な問題にも開かれている。

本研究が「縁」に着目するのは、それが仏教思想の影響を受けたアジアの諸地域で広く共有されている概念であることに起因する。日本社会を対象とした人類学・民俗学的研究では、地縁・血縁・社縁といった概念が提起され、日本的な共同性理解の基盤となった。近年の「無縁社会」論も、こうした枠組みの延長線に位置づけられる。この議論を、欧米の人類学が提起してきた共同体論や「つながり relatedness/connectiveness」の議論と接続する試みは、特に親族や移民研究の分野で行われつつある。しかしその一方、当該分野の議論においては、「縁」という概念が宗教性を色濃く帯びていることがこれまでほとんど等閑視されてきた。

縁や因縁、縁起といった概念は、これまで仏典等のテキスト研究を中心に扱われてきた。一方で、この概念は実際の場面ではテキストに説かれる理念だけに還元できない多様性をもって用いられている。そこには、仏教以外の宗教、思想の影響も認められる。本研究では、チベットの宗教の超地域的なネットワークを追いながら、人びとの結びつきのいかなる面において「縁」がリアリティを持つのかを調査する。それは、チベットの宗教文化の展開の最前線を解明することにとどまらず、他地域における「縁」概念との比較研究を通じて、アジアにおける共同性の動態の解明へと開かれている。

## 2. 研究の目的

上記の背景にもとに、本研究はチベットの宗教、とくに伝統宗教であるボン教徒に着目し、かれらが地域を越えて構築する共同性を、「縁」概念を手がかりにして解明することを目的とする。具体的には、以下の項目について明らかにする。

### (1) 「縁」はいかに認識され、説明されるか

「縁」および関連する概念（「因縁」「縁起」「因果」等）に関して、ボン教徒がどのように認識し、説明するのかを明らかにする。文献調査としては、チベット語で書かれた僧侶の伝記における記述を分析する。フィールド調査として、中国・インド・欧米で活動する僧侶と、一般信徒の調査を行う。両者の比較から、テキスト上の教義と実践との差異とその特徴について明らかにする。

### (2) チベット人の宗教ネットワーク形成における「縁」の位置づけ

ボン教徒のグローバルなネットワークをたどり、その形成において「縁」がどのような役割を果たしたのかを明らかにする。ボン教徒のライフストーリーから、師や支援者との出会いや神秘体験等のエピソードがどのように語られるのか分析する。

### (3) 集団的宗教実践の場の形成に「縁」がいかに作用するのか

多様な背景を持つ信徒が参加する大規模な儀礼に着目し、人びとがボン教や高僧との「縁」をどのように語るのか、また実際にどのようなつながりが生じ維持されるのかを分析することで、地域や民族を越えた宗教の求心力について明らかにする。

以上から、宗教実践の場の形成と共同性の構築における「縁」概念のはたらきを包括的に解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献調査

文化人類学・チベット学および関連分野の文献を参照しながら、縁に関するチベット語文献、とくに僧侶の伝記を精読し、その中において縁と関連する概念がどのように表現されるのかを明らかにする。この調査においては、チベット人研究者からの専門知識の提供を受けながら分析を進める。

### (2) フィールド調査

中国四川省松潘県およびインド・ヒマチャルプラデーシュ州のボン教僧院においてフィールド調査を実施する。この調査においては、まず高僧をはじめとする宗教指導者と一般信徒への集中的なインタビューを通じて、彼らが「縁」をどのように語るのかを記録し、その傾向と特徴を明らかにする。また、数百名規模が参加する大規模な集団的宗教実践の場において参与観察を行い、その場において参加者のあいだにいかなる関係が構築されているのかを分析する。さらに、

儀礼の過程において生じる「一体感」や「つながり」といった感覚と、「縁」や関連する概念の連関を調べるため、儀礼の過程を撮影機材によって記録し、映像分析と経験的記述、インタビューにおける語りの記述を組み合わせて、共同性がたちあがるメカニズムを解明する。

#### 4. 研究成果

本研究においてはまず、宗教的共同性に関する研究文献や、チベット仏教およびボン教の僧侶による著作を対象にした調査を行い、本研究の理論的基盤の構築を目指した。その過程で、縁概念をいくつかのカテゴリーに分類し、相互の関係について考察した。

文化人類学および関連分野においてもちいられてきた社会関係をあらわす概念としての縁を「社会的縁」としてとらえ、生得的な社会関係から成長に伴って加入する組織、個人を基盤とするネットワークへとその変容を跡づけた。こうした変容の中で、縁は個人が自立した主体として選び取るものとしての性格が強化されてきたことを見いだした。一方、チベット仏教をはじめとする仏教の教理哲学で構築されてきた、世界と事物の成り立ちを説明するための縁を「哲学的縁」としてとらえ、その用例について分析した。このカテゴリーは、インド思想から初期仏教にみられる因果説から、チベット仏教中観派を中心とする縁起説まで、多様な展開をとる。文献調査を進める中で、仏教以外の宗教における類似の概念との共通点や相違点を明らかにするという課題も提起された。これらを架橋するために、非日常的経験の中で非主体的に巻き込まれる経験を捉えるための視座として「宗教的縁」を提起した。これまで収集してきたチベットにおける僧侶および俗人のライフストーリーから、人生の転機となった縁の体験を抽出し、それが仏教的因果関係で説明される場合と、むしろ説明不可能なものとして語られる場合があることを見いだした。

チベット語文献の調査においては、チベット人研究者の協力のもと、高僧の伝記の精読を行い、その中における「縁」「因果」「業」といったことばの用例を収集した。ボン教僧侶に加えて「ツォンカパ伝」や「ミラレーパ伝」など、チベット仏教の重要人物の伝記も分析対象とした。ここでは、人生の転機となる出来事や出会いは、仏教/ボン教の教えとの縁によってもたらされるものであり、過去の行為に起因するものであることが示唆されるが、その具体的な過程は明示されない、もしくは凡人には不可知とされることが多い。そのため、この過程を解釈する際に、土着のものを含めた多様な概念が入り込む余地があると考えられた。

フィールド調査については、まず2017年度に中国四川省成都市のボン教徒および松潘県のボン教僧院を対象とした調査を行った。とくに松潘県においては、代表者が2005年以来調査を継続しているS僧院の集会堂改築に伴う落慶法要の参与観察を行い、参列者と僧院のつながりについての資料を収集した。並行して、ボン教僧侶のライフストーリー調査を行った。ボン教の僧院は僧院長の系譜に基づく血縁関係と、宗教的空間を共有する地縁関係を基盤とする複雑なネットワークを構築しているが、それに加えて近年個別の地域性をこえた「ボン教徒」としてのつながりが大きな役割を果たしていることが明らかになった。

続けて2018年度には、インド・ヒマーチャルプラデーシュ州のボン教僧院における調査を行った。僧院の座主就任儀礼の参与観察と、世界各地から儀礼に参加したボン教徒に対するインタビュー調査を実施した。とくに、アメリカ、ニューヨークを拠点として活動するボン教僧侶と米国人信徒に対するライフストーリー調査を重点的に行い、かれらがいかなる過程をへてボン教と出会い、そこに「縁」のリアリティを感じるか、それを英語とチベット語でどのように表現するのかを調査した。そこからは、英語において「縁」が説明される場合はより主体の強化と結びつく傾向があることが示唆された。

これらを踏まえて、フィールド調査で得られた資料と、文献調査の知見を組み合わせた分析を行った。文献調査からは、「縁」概念の主に口語的な用法や前後の文脈に関する詳細な検討を手がかりにして、仏教的な思想だけに還元できない要素を見だし、それに偶然や幸運といった要素が関連していること、そしてそれが実際のフィールドで聞き取りを行った人びとからはしばしばボン教的、土着的と解釈されていることが明らかになった。フィールド調査の結果からは、これを裏付けるように、宗教実践をめぐって発生する偶然の出会いが、共同性の構築に深く関わっていることが明らかになった。ここで構築されたつながりが、高僧との対話や、大規模な儀礼への参加を通じて強化されていくことが示唆された。

こうした知見を補強していくために、中国のボン教僧院にルーツを持ち現在アメリカ合衆国を拠点に活動するボン教僧侶と信者コミュニティに関する調査を計画したが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって調査実施が困難になったため、研究期間の延長を行った。しかし、延長期間中にも状況の改善が見られなかったため、これまでに収集した資料の分析とまとめ、公刊に向けた作業に集中した。縁と共同性に関する文献分析を哲学、宗教学分野にも拡大し、縁を仏教的な文脈にとどまらない形でコミュニティ論と接続するための道筋を探った。そこから、異質なもの同士の出会いが新たな共同性を生み出す過程に関する考察を行った。この問題関心は、チ

ベットと日本の比較研究を視野に、科研費基盤研究 C 『縁結び』とコミュニティ構築に関する比較研究：日本とチベットの事例から」（課題番号：21K01067）へと引き継がれた。

以上からは、チベットの宗教実践をめぐるつながりの生成のメカニズムが、単にグローバルとローカルのせめぎ合いという枠組みでとらえられるものではなく、多様な背景を持った人びとの偶然の出会いによって支えられていること、またその出逢いが「縁」の枠組みで語られ説明されることによって、チベットの宗教的価値観の存続にも寄与していることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小西賢吾	4. 巻 178
2. 論文標題 「あふれかえるモノと宗教性 チベットの儀礼の諸相から」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小西 賢吾	4. 巻 49
2. 論文標題 宗教復興とグローバル化を経た「辺境」のいま 四川省松潘県のボン教徒をめぐるネットワークの変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国21	6. 最初と最後の頁 111-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KONISHI, Kengo	4. 巻 75
2. 論文標題 Maintenance of the Bonpo monastic community in contemporary Tibetan society: With special reference to performance of 'cham in Amdo Shar-khog	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Memoirs of the Toyo Bunko	6. 最初と最後の頁 177-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小西賢吾	4. 巻 -
2. 論文標題 ボン教における「僧侶」の諸相 20世紀以降の変容に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開（京都大学人文科学研究所共同研究報告）	6. 最初と最後の頁 229-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小西賢吾	4. 巻 7
2. 論文標題 縁と身心変容 「縁」概念の比較研究に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 身心変容技法研究	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 聖と俗のはざまを生きる ボン教僧侶からみる宗教と社会
3. 学会等名 人文研アカデミー2021 出版記念連続セミナー『チベットの歴史と社会』、京都大学人文科学研究所（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 宗教的マイノリティと言語：チベット、ボン教徒の事例から
3. 学会等名 大学英語教育学会（JACET）言語政策研究会2020年度年次特別研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 文化人類学的感性を / で教える グローバル・教養教育の現場から
3. 学会等名 京都人類学研究会季節例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 ボン教の文化 - 現代を生きるボン教徒の諸相
3. 学会等名 第22回ヒマラヤ宗教研究会国際シンポジウム「弱者を生きぬくチベットの知恵」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小西 賢吾
2. 発表標題 つながりをつくるモノ チベットの宗教実践の事例から
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究(若手)「モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 チベットにおける人類学的フィールドワークのために いくつかの技法と心構え
3. 学会等名 第5回チベット学情報交換会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 縁と身心変容: アジアにおける『縁』概念の比較研究に向けて
3. 学会等名 身心変容技法研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kengo, KONISHI
2. 発表標題 “ Living as Bonpo monks in Sharkhog: Discipline, Livelihood, and Monastic Community on Social Changes ”
3. 学会等名 14th seminar of the International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 ボン教のレジリエンス 人・思想・自然のつながりから
3. 学会等名 公開シンポジウム「チベット文明のレジリエンス」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小西賢吾
2. 発表標題 チベット、ボン教徒の過去・現在・未来 グローバル化するチベット文明の一側面
3. 学会等名 比較文明学会関西支部例会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 熊谷 誠慈、三宅 伸一郎、小西 賢吾、ダニエル・ペロンスキー、箱寺 孝彦、チューコルツァン・ニマ・オーセル、テンジン・ワンギェル・リンポチェ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 258
3. 書名 ボン教	



1. 著者名 山田 孝子(編) 小西 賢吾(分担執筆)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 英明企画編集	5. 総ページ数 192
3. 書名 人のつながりと世界の行方	

1. 著者名 鎌田 東二(編) 小西 賢吾(分担執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本能率協会マネジメントセンター	5. 総ページ数 624
3. 書名 身心変容と医療/表現 ~近代と伝統	

1. 著者名 岩尾 一史、池田 巧(編) 小西 賢吾(分担執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 430
3. 書名 チベットの歴史と社会 下	

1. 著者名 石森大知、丹羽典生(編) 小西賢吾(分担執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 448
3. 書名 宗教と開発の人類学	

1. 著者名 神本 秀爾、岡本 圭史（編） 小西賢吾（分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 312
3. 書名 マルチグラフト：人類学的感性を移植する	

1. 著者名 小西 賢吾、山田 孝子、小河 久志、川村 義治、川本 智史、桑野 萌、小磯 千尋、坂井 紀公子、藤本 透子、アヒム・バイヤー、本康 宏史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 英明企画編集	5. 総ページ数 176
3. 書名 弔いにみる世界の死生観	

1. 著者名 山田 孝子、小西 賢吾、大森 重宜、ジェームス・ロバーソン、小磯 千尋、本康 宏史、アヒム・バイヤー	4. 発行年 2018年
2. 出版社 英明企画編集	5. 総ページ数 168
3. 書名 祭りから読み解く世界	

1. 著者名 山田 孝子、小西 賢吾（編）、池谷 和信、川村 義治、ジェームス・ロバーソン、小磯 千尋、本康 宏史、アヒム・バイヤー	4. 発行年 2017年
2. 出版社 英明企画編集	5. 総ページ数 144
3. 書名 比較でとらえる世界の諸相	

1. 著者名 西澤治彦、河合洋尚（編）、末成道男、長沼さやか、阿部朋恒、奈良雅史、小西賢吾、田中孝枝、丹羽朋子、梶丸岳、田仲一成、佐々木衛、田村和彦、川口幸大、劉正愛、佐藤仁史ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 558
3. 書名 フィールドワーク 中国という現場、人類学という実践	

1. 著者名 中牧弘允（編）小西賢吾（項目：中華人民共和国（チベット族）を執筆）ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 432
3. 書名 世界の暦文化事典	

1. 著者名 永沢哲、小西賢吾、井内真帆、石濱裕美子、上田晶子、長田幸康、熊谷誠慈、クンガ・テンバ、佐藤剛裕、田上操、齋藤保高、辻村優英、箱寺孝彦、福田洋一、星泉、マルク＝ヘンリ・デロッシュ、三浦順子、三宅伸一郎、安田章紀、吉村均他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 サンガ	5. 総ページ数 764
3. 書名 『サンガジャパン vol.24 チベット仏教』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------